梅林

熊谷九寿

制作年：1940(昭和15)年
サイズ：41.0×53.0cm
材質：油彩、カンヴァス
所蔵：中津市木村記念美術館
1993(平成5)年中津市に寄贈される。

熊谷は昭和14(1939)年の資生堂での初個展と、昭和15(1940)年の2回目の個展に、それぞれ「南瓜」を出品した事が当時の展覧会批評からわかっています。初個展の会場写真には、中津市所蔵の「南瓜」と似た作風の別の「南瓜」が写っています（スナップ参照）。また、中津市所蔵の「南瓜」が第2回個展の出品作にあたるかどうかは今の所断定できません。もし2回目の個展に出品されたのが別の「南瓜」であったとしても、同年制作の中津市所蔵の「南瓜」はその作風に近いものであると考えられます。

白い水平面に影のような南瓜が水墨画のようにぼうっと浮かび上がっています。南瓜の質感を表すよりも、ものの存在感そのものを表そうとしているようです。第2回個展に出品された「南瓜」については、次のような批評があります。「特に南瓜には色感に東洋的な味わひがあって面白い。ただこの作家の絵には西欧的なニヒリズムとは違った宗教的諦観思想のやうなものが附きまとってゐるから、一歩をあやまれば、悟りきれない禅坊主のやうな独りよがりの悪趣味に堕する危険も無いとはいへぬ。」（「展覧会月評　熊谷九寿個展」造形藝術2巻7号、昭和15(1940)年7月)見る側は落ち着いた色感に東洋的なものを感じるとともに、一歩引いた悟りの境地から世の中を見つめる眼を感じ、またその手法がまだ未完成の途上にある事からくる危うさをも感じるようで、この事は中津市の「南瓜」においても同様の事が言えるでしょう。